［流域圏学会誌 第２巻 第１号 43 2013］

＜新刊紹介＞

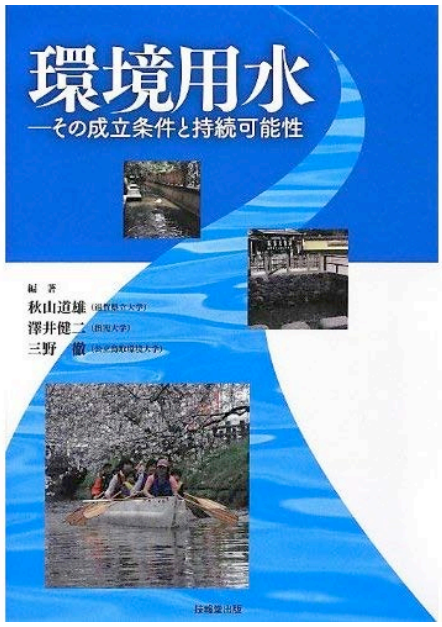
秋山道雄・著「環境用水～その成立条件と持続的可能性～」

村上 雅博（高知工科大学環境理工学群 教授）

本書は，秋山道雄・澤井健二・三野徹が編著者となり，地域のフィールドワークをベースに「環境用水」についてこれまで著者が書かれた論文や報告書を中心にまとめられ，(株)技報堂出版より刊行された著書である。

著者が環境用水の研究を始められたきっかけは，旧建設省が 1995 年に中間取りまとめを行った「環境用水の水使用の取り扱いについて」および 1997 年の河川法改定で初めて地域住民の参画と環境が法的枠組みに位置づけられたことを踏まえているが，21 世紀の地域の環境政策の課題を見つめ，河川の流水と水利用に流域と環境資源の概念を付加して地域の共有（自然）資源を誰がどのように管理していけばよいか，そのために地域の大学や研究者や行政の役割とは何かの問いかけにあるように受け止められる。その第一歩として 20 年以上の歳月をかけて地道にフィールドワークを積み重ねてきた成果を整理して取りまとめて社会に還元させる，その思いが伝わる著書である。

具体的な内容は３部構成で，第１部：環境用水を支える要素と枠組み（環境用水の成立と展開方向／環境用水の法的性質／環境用水とその指標　ほか），第２部　環境用水をめぐる制度～外国の事例から（環境用水の確保と水利権制度改革／生態系保全と渇水政策：2009 年カリフォルニア渇水銀行を例に），第３部　環境用水の活用～各地の取組み（環境用水導入と地域の取組み：淀川左岸の事例から／水辺整備計画と住民運動：淀川左岸の事例から／水利権取得における環境用水の位置：近江八幡市小田町の事例から　ほか）からなっている。

貴重な労作であるフィールドワークの具体的な資料が整理され示されているが，すでに問いかけが始まっている共有（自然）資源（コモンズ）やソーシャル・キャピタル研究に関するフィールドワークが付加され，さらにカリフォルニア州の水資源・環境管理の事例研究紹介に加えてダム・堤防の撤去や河川の自然再生が進む米国や欧州の環境用水の研究事例が対比されると，さらに魅力的な研究に発展する可能性があるのではないかと期待している。

[ISBN 978-4-7655-3458-1・208 頁・2,940 円・2012 年
11 月刊・(株)技報堂出版]